

若戸大橋建設に際しての博覧会会場設置とその跡地利用に関する研究
A Study on Installation and After Use of a Site for the Memorial Exposition at
the Opportunity to Construct the Bridge 'Wakato-Ohashi'*

松尾篤史**, 仲間浩一***
By Atsushi MATSUO**, Koichi NAKAMA***

1. はじめに

埋立や都市構造の再編による新たな都市空間の創出や大規模な土木事業が竣工する際にそれを記念した博覧会が実施される例は少なくない。戦前には、埋立地での勧業博覧会等が多くの地方都市でも開催され、戦後は土木技術の進歩を反映して、トンネルや長大橋、大規模な港湾埋立地の建設を記念したイベントが行われてきている。

このような土木施設の建設を記念したイベントの開催は、土木施設の本来の機能とは基本的に関係がないという考え方もある一方で、現代社会においては都市経営という観点から逆にイベントを活用し、そこで発生した跡地を有効に利用して、その後の都市空間の開発や都市構造の再編の契機となった例もみられる。従って、用地の立地特性や用地確保の方法を活かした跡地利用に着目し、都市空間の変遷過程におけるイベントの意義を評価することも必要と思われる。

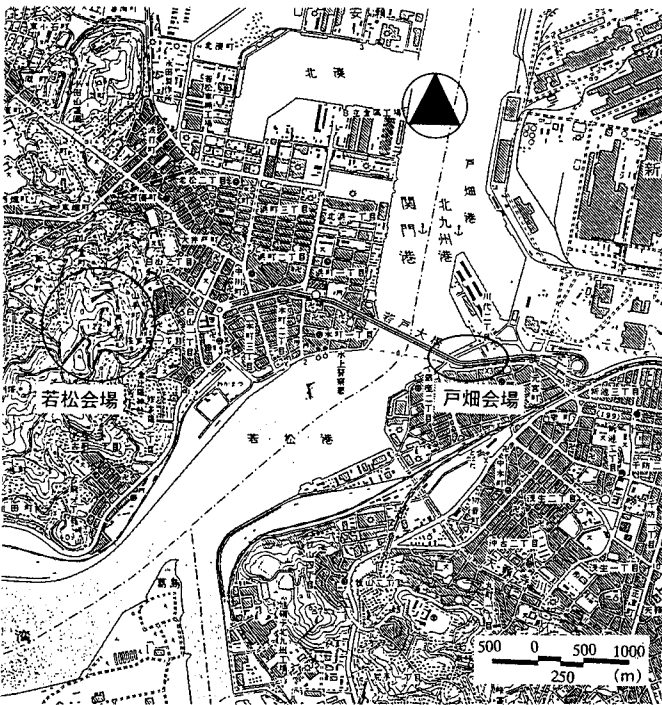


図1 若戸博における若松・戸畑会場の立地

*キーワード：景観、公園・緑地、余暇・空間設計
**学生員 九州工業大学工学部設計生産工学科建設コース
***正員 工博 九州工業大学工学部建設社会工学科
(福岡県北九州市戸畑区仙水町1-1 Tel.093-884-3112
Fax.093-884-3100)

本研究は、高度経済成長期に巨費51億円をかけた北九州地域における一大土木事業である若戸大橋の建設に着目し、その供用時に開催された「若戸大橋完成記念産業・観光と宇宙大博覧会」、通称「若戸博」を研究対象とする。

その会場用地の確保と空間整備のあり方を調べることで、洞海湾を挟んで向き合う若松・戸畑の両市街地の会場用地がどのような関係を持ったのかを考察する。さらに現在に至るまでの会場跡地の利用の変遷をたどり、北九州市合併後の若松・戸畑地区での都市空間における博覧会用地の役割、位置づけを明らかにする。図1に研究対象地域を示す。

2. 博覧会の概略と会場の建設

(1) 博覧会の事業概略

昭和37（1962）年9月26日の若戸大橋開通に合わせて、「若戸博」は福岡県・若松市・戸畑市の共催によって行われ、開催期間は同年9月28日～11月25日の計59日間、延べ入場者数は226万8,715人であった。若戸博総事業費は6億5,000万円で、その資金は、若松・戸畑市の市交付金1億6,400万円、福岡県の若戸博交付金1,700万円及び入場料等によってまかなわれた。

若松市は、都市公園の急速な整備のために、昭和35年から37年にかけて一般会計からの繰入金やロープウェイの収入などによる特別会計「高塔山観光施設整備費」を予算化し、35・36年にそれぞれ3,000万円、2,000万円を博覧会協会交付金として確保している。

一方、戸畑市の博覧会会場用地は、博覧会終了後に都

表1 若戸博歳入・歳出表

歳入品目	予算額	歳出品目	予算額
事業収入	220,557,400	事務費	103,725,200
県支出金	17,000,000	出品費	49,649,700
市交付金	164,000,000	宣伝費	33,368,400
寄付金	100	仮設費	65,748,400
雑収入	8,077,960	遊戯施設費	26,851,000
遊戯施設収入	26,851,000	施設費	41,100,000
委託金	2,100,000	移転補償費	110,400,000
歳入合計	438,586,460	公債費	6,450,000
		予算費	1,293,760
		歳出合計	438,586,460

市公園に再整備することを念頭に置き、一般会計より用地買収に1,454万5百円を支出し、海岸ビルの建設を行い、36・37年にそれぞれ2,000万円、3,357万6千円を博覧会協会交付金としている。用地確保に伴う移転補償費1億1,040万円については、その大部分を博覧会協会交付金の中から博覧会協会が支出して対応した。

(2) 博覧会会場の建設

博覧会会場は、若松市の都市公園である高塔山公園内と、戸畑市の若戸大橋桁下周辺の2ヶ所に建設された。北九州市への合併を翌年2月に控えた両市にとって、若戸大橋は戦前より度々議論が繰り返された両市合併運動のシンボルとして位置づけられ、両会場は開通した若戸大橋や、両市の共同運航による若戸渡船、および昭和33（1958）年8月に若松観光協会により建設された高塔山ロープウェイを乗り継ぐことにより結ばれていた。

若松会場が設置された高塔山公園は、標高120メートル、有効面積6,600平方メートルで、戦前の昭和14（1939）年に地元運輸会社の寄付金によって用地を買収し、防空的な意義を持つ都市計画公園として整備され、頂上部に高射砲台が設置されていたが、一部を市民に解放することによって余暇空間として存在した。戦後には再整備を経て昭和30（1955）年4月より供用されている。若松会場では、博覧会開催に先立って公園区域内の3,600平方メートルに2300万円をかけ、遊具施設整備が行われ、昭和37年4月1日に「こどもの国」として既に開園していた。会場設置の際には都市公園の恒久施設として若松市が子供プールを建設、西日本鉄道株式会社が展望休憩所を寄贈するなど、観光・文化・郷土に主眼をおき、22の施設で構成された。道路工事としては、一部民有地を買収して登山道より会場までの1,654メートルと、会場裏口より本通りに下る参道1,821メートルは、昭和6年に幅員5メートルで工兵隊が築造したものであったが将来の観光道路の一環を担うものとして拡幅・舗装した。また、若松会場用地は急傾斜地を含む山岳であることから、民間企業ではなく自衛隊の第四施設大隊による土工・造



写真1 若松会場の自衛隊による整地（文献1引用）

成が行われた。（写真1参照）

一方戸畑会場は、24の施設から成り、宇宙と産業をテーマとしたものであり、若戸大橋の橋台付近の港湾に隣接した平坦地に建設された。この地を会場に選定した理由として旧戸畑市は博覧会開催当時全国で1、2を争うほど人口密度が高かったことと都市開発の点から早急な整備が必要であったことが挙げられる。会場の用地確保にあたっては住宅や事務所が混在した私有地4,000平方メートルを買収し、公有地と合わせて計22,800平方メートルとした。会場の施設整備のため、いったん更地にし（写真2参照）既存建築物と樹木を撤去した後に、恒久施設としての展示館や、造園、および仮設物の配置を行った。また、東京晴見の国際見本市会場で開催された宇宙博（1961年開催）の展示品及びプラネタリウムの移設を行い、設備の展示費用を節約するとともに北九州地域の新たな産業観光のイメージ付けに寄与した。



写真2 戸畑会場建設時の整地風景（文献1引用）

3. 博覧会開催時における会場の立地条件と眺望

博覧会開催時点で、既存市街地と若松・戸畑両会場の位置関係や立地条件は大きく異なる。若松会場は前述の通り、博覧会開催以前より若松市民にとって市街地に隣接した自然の豊かな余暇空間であった。会場の設置により、高塔山公園の余暇空間としての機能は強化・付加され、都市公園としての利便性が向上し誘致圏も大きく拡大したと言える。一方、戸畑会場は、買収と区画整理により独立した用地を確保した。このため、明治末期以来、路面電車と若戸渡船の2つの公共交通の接点に立地した生活・業務空間としての機能が失われ、既存の市街地との間に若戸大橋の桁下空間を挟んで対峙する空間配置となった。

両会場から得られる市街地や若戸大橋への眺望も大きく異なった。若松会場では会場内部をバス駐車場から順を追って周回できるように園路が設定され、若戸大橋を含む市街地や洞海湾沿いの工場群に対して、展望センターを中心として、幾つかの滞留場所からそれぞれ異なった方角への視軸が確保できるように設計されていた。また、高塔山公園ふもとの佐藤公園にあった「公園駅」、公園頂上部にあった「かっぱ駅」を結ぶロープウェイに

よって高さによる眺望の変化が楽しめた。若松会場は、傾斜・丘陵地という地形条件を利用した総合的な展望施設空間であったといえよう。展望センターからは、小倉・八幡の市街地まで眺望することができ、若戸大橋の架かる洞海湾口の水際線にむかって俯角10度の範囲に若松市街地が分布している。このような視野角の広い眺望景の中で、博覧会の主役である若戸大橋は添景として位置付けられる。（写真3参照）また、北九州五市、特に若松・戸畑の新たな関係を実感できる山の会場であったといえる。



写真3 若松会場からの眺望（著者撮影）

これに対し、戸畑会場は若戸大橋の橋詰に近接して立地したため、長大橋である若戸大橋に対して頭上から対岸へと仰観する眺望が得られ、土木技術の進歩と若戸大橋の雄大が感じられる（写真4参照）。また、会場自体が平坦であるために戸畑の既存市街地よりも、洞海湾の対岸の水際市街地が主要な視対象となった海の会場といえる。



写真4 戸畑会場からの眺望（著者撮影）

尚、開通当時の若戸大橋は、歩行によって渡ることができ、若戸大橋から北九州工場群を含む両市街地を眺望することができた。すなわち橋梁という土木施設が一つのレクリエーション空間であり（写真5参照）、両会場と若戸大橋の周遊それ自体が新たな観光コースとして設定され、若戸博当時には多くの観光客が利用した。

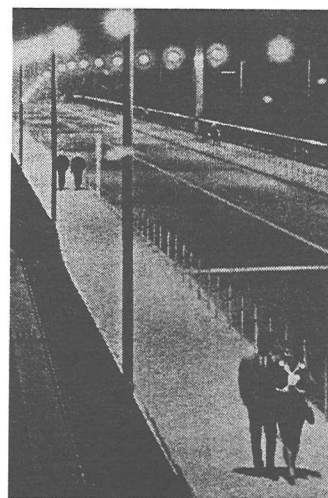
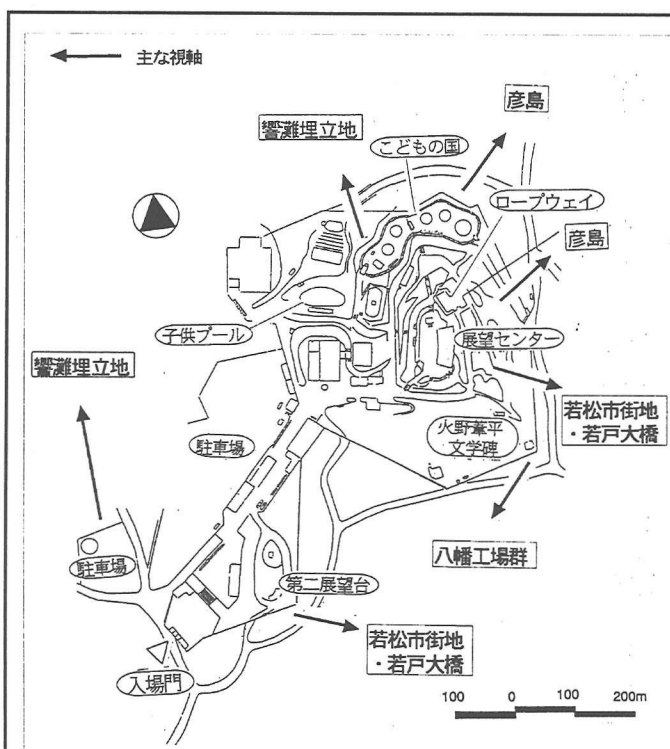
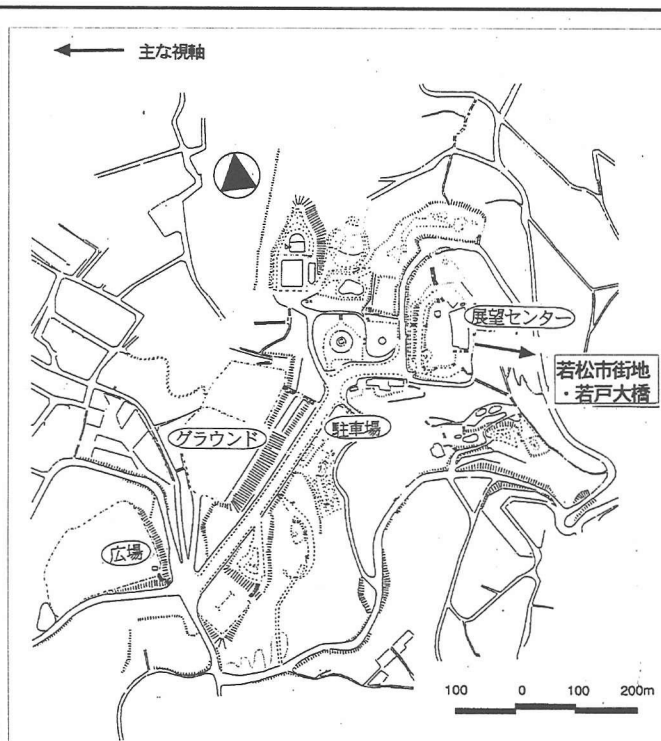


写真5 若戸大橋人道（文献1引用）



若戸博当時の若松会場



現在の若松会場跡地

図2 若松会場の变化

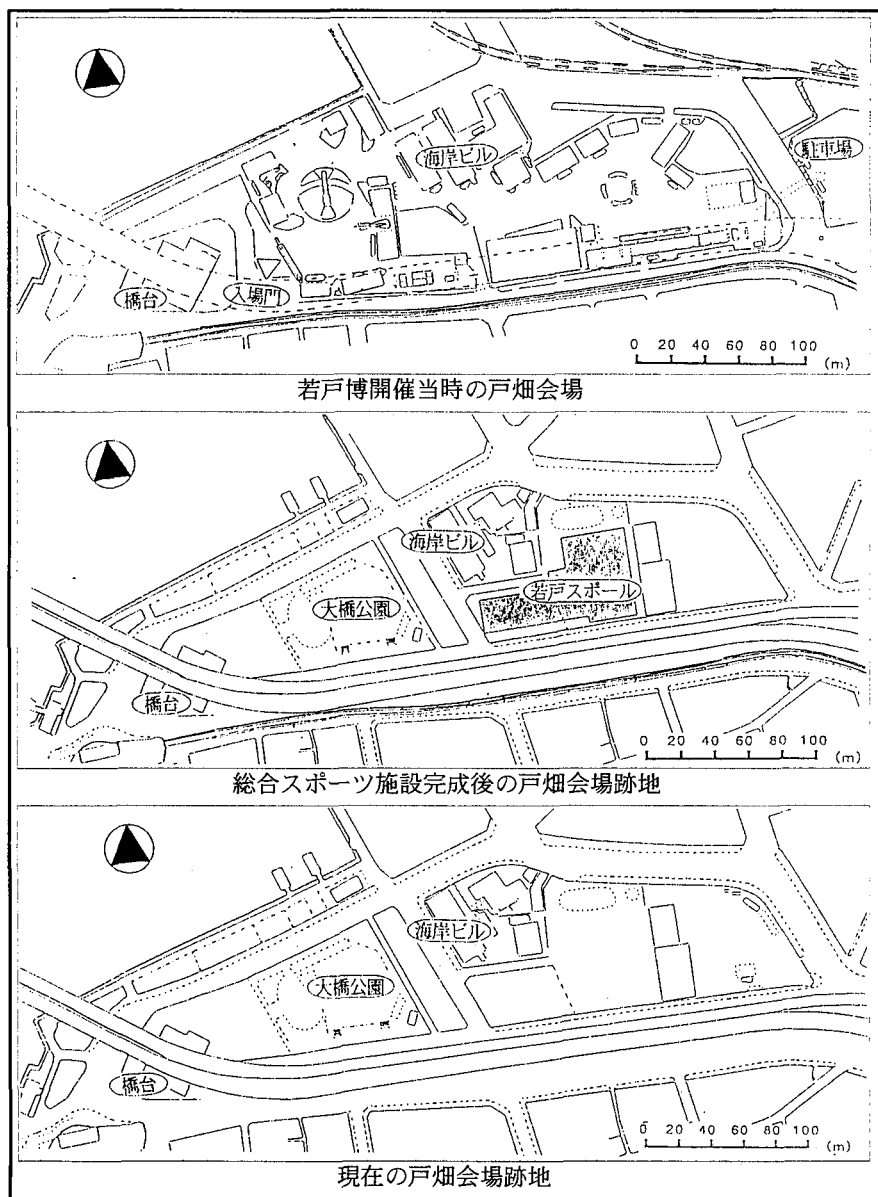


図3 戸畑会場の変化

4. 会場跡地の利用変遷と周辺市街地の変化

(1) 会場跡地の空間構成と利用の変化

博覧会終了後、両会場跡地の空間構成や市民による利用施設の内容は大きく変化した。

若松会場では、博覧会閉会直後に「こどもの国」が970万円で昭和鉄工株式会社に払い下げられたが、北九州市の他の観光施設と競合、また観光施設としての陳腐化によって集客力が弱まり撤去を余儀なくされた。また高塔山ロープウェイも昭和40年4月には経営不振のため休業し昭和46年には廃止された。このため、高塔山公園での周回可能な空間構成は失われると同時に、市街地からのパブリックアクセスは自家用車と遠距離の徒歩に限定された。また展望センターの裏側に駐車場が設置され、駐車場と休憩展望所の往来だけとなり、固定された滞留場所から市街地への固定的な眺望が、公園を訪れる人の中心となる体験となっている。このことにより、現在では広域的な観光レクリエ

ーション空間としての機能はほぼ失われ、少数の周辺居住者が、散策などに利用する程度ではあるが、生活空間に隣接した自然豊かな空間となっている。(図2参照)

戸畑会場では恒久施設として建設されたRC3階建ての海岸ビルが残存したほか、プラネタリウムドームを金比羅公園に移設し、港際に面した跡地の一部を都市公園「大橋公園」として整備し、昭和40(1965)年3月に供用している。また、平坦な跡地を外国車展示会等の一過的なイベントに使用したのち、一旦市民によって認知された都市レクリエーション機能を引き継ぐものとして、プール・浴場・ボーリング場などを備えた総合スポーツ施設「若戸スボール」が民間企業により建設され人気を博した。これは、若戸大橋を中心とした北九州地域における新たな事業である産業観光を目指したものであった。しかし、アミューズメント施設を大型化し統合したものであったために他の施設との競合または陳腐化、北九州の観光事業の希薄化などにより、昭和50年代には利用者が減少し、昭和60(1985)年10月に西日本鉄道の路面電車戸畑線が廃止されるのに併せて閉鎖、現在は撤去され遊休地となっている。この結果、戸畑会場跡地は一部が小規模な都市公園として維持されているにとどまっている。

(図3参照)

若戸大橋は、その後のモータリゼーションの急速な発達、施設の運営・管理の変更に伴い、観光的な価値が年々低下していき、地理的に若松と戸畑を結ぶという本来の機能に移っていった。

若戸大橋の完成を記念した花火大会が博覧会開催翌年より会場跡地で開催されていたが、昭和40年には、中止となり、若松・戸畑地域における若戸大橋に対するイベントの連続性も喪失してしまった。

(2) 周辺市街地の空間構成・交通網の変化

博覧会開催時を中心に前後の3つの時期に関して、公共交通網の変遷をまとめた。

若戸大橋開通前、両市街地を結ぶものは若戸渡船だけであり、渡船場はバスと路面電車が隣接する結節点であったため、戸畑市街地における表玄関の一つとなっていた。また国鉄戸畑駅から渡船場へ向かう商業機能を備えた区画街路により、歩行系の軸線が維持されていた。

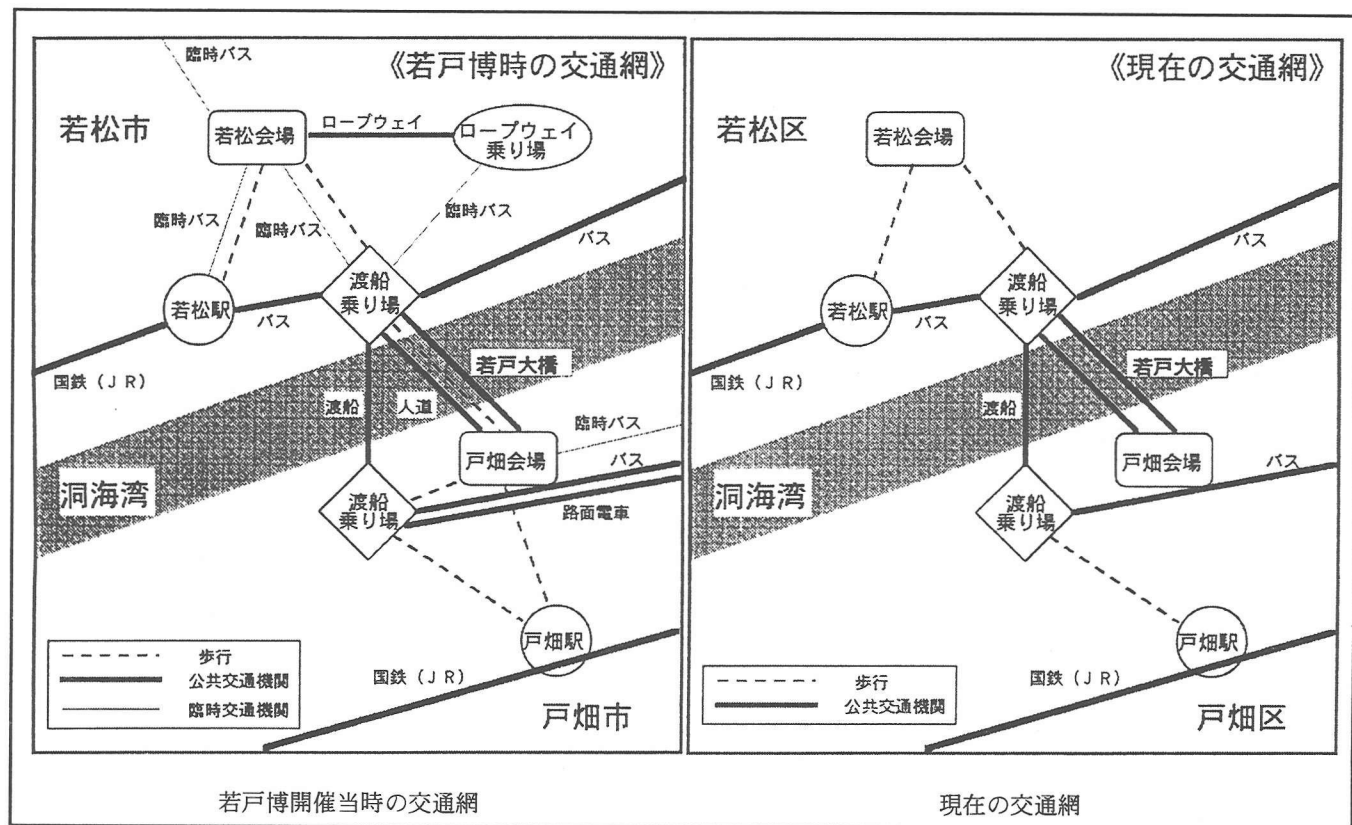


図4 交通網の変遷

若戸大橋開通により、渡船以外に大橋の歩行と自動車交通という手段が付加され、路面電車・渡船・歩行・ロープウェイ、という多様な歩行者のための交通網が一時期定着した。特に博覧会開催時は若松会場へ向かう臨時バス網が数かれ、大量の来訪者が移動することにより2つの市街地は多重的な交通手段によるつながりを持った。しかしその後、現在に至るまでに、索道系交通と軌道系交通が廃止され、歩行系交通が衰退し、市街地や会場跡地相互の行き交いは単一的な手段に固定されるか、あるいは消滅した。(図4参照)

若松会場跡地では、市街地・渡船場からのアクセスが自家用車のみに依存することとなり、アクセス自体にレクリエーション性が喪失し、生活の中での市街地とのつながりは認識しにくくなっている。また戸畑会場跡地では、戸畑駅南側のステーションビル建設による歩行軸線の変化、若戸大橋の4車線拡幅に伴う人道の廃止、若戸大橋と都市高速の連結等により、水際での滞留機能が期待されず、交通手段の乗り換え地(結節点)としての機能だけを有することになった。一旦失われたレクリエーション空間としての機能は現在に至るまで復活せず、また遊休地となった故に本来の生活空間としての機能も取り戻せずにいる。近年は、会場跡地を含む戸畑駅北側市街地と新たに発展した南側との連携を狙って、駅を挟んで地下道の建設が計画されている。

また、昭和39年の国道199号線の開通により若松市街地は、北九州地域の中心市街地である小倉との関係が強化され、戸畑市街地は単なる通過点となってしま

い、若松・戸畑の関係の強化を担うと期待された若戸大橋は、結果的に生活空間としての両市街地の関係を分断していると言える。

以上に述べた博覧会後の跡地利用と交通網の変遷等について、表2の年表を掲げる。

表2 若戸博に関わる空間変遷の年表

	日付	出来事
昭和37年	12月7日	会場撤去終了
昭和38年		子どもの国 民間に売却後、閉園
昭和39年	1月	国道199号 小倉-若戸大橋間開通
	9月27日	戸畑駅新築(現戸畑駅南口ステーションビル)
昭和40年	3月5日	整地した大橋公園に360本を植樹し供用開始
	4月1日	高塔山ロープウェイ運行休止(昭和46年廃止)
	6月7日	戸畑会場跡地に総合スポーツ施設若戸スポール開館
昭和59年	5月	若戸大橋拡幅に着工(歩道の廃止)
昭和60年	10月16日	若戸スポール閉館
	10月19日	西鉄電車 戸畑線を廃止
平成2年	3月	都市高速、戸畑-若戸大橋間開通
	3月	若戸大橋拡幅完工(車道を4車線に)

5. 若戸博跡地に見る空間計画上の評価

若松会場と戸畑会場は、用地の確保という点で対照的な方法を取り、結果としてその方法上の特徴に応じた変遷をたどり、現在の両市街地での独自の位置づけを得るに至っている。

市街地の外側にある都市計画公園を拡張・改造し、公園本来のレクリエーション機能を強化しようとした若松会場は、レクリエーションニーズの変化や衰退によって、次第に市街地にとって「分相応」の機能・役

割を担うように変化した。博覧会での都市的利用のピーク時から見ればそれは「衰退」であるが、市街地側から要求される日常の利用空間に立ち戻る経緯であったと言える。このため高塔山公園は、残った一部の恒久施設とともに、地形を活かした本来の眺望の良さや自然環境の豊かさ等、自然公園に近い魅力を、公有地として持ち続けている。

戸畑会場跡地は、市街地中心部で県有地と市有地をあわせ混在する民有地を買収することにより、まとまった敷地を確保したものの、多くの土地を民間企業の個別の活動に供したうえ、産業的利用と生活的利用との区別も明確でなく、公共交通の手段も民間の手によったため、長い計画的視野に基づく用地利用がなされなかった。北九州市では貴重な、洞海湾へのパブリックアクセスをもつ場所という特性を現在まで活かしていないのである。

6. まとめ

(1) 博覧会開催により、若松会場は都市公園として以前から持つ機能を強化・付加され、戸畑会場では旧来の日常的な都市空間からは独立した新たな遊園機能を与えられた。また、若松、戸畑の両会場は、各立地場所の地形条件や用地確保の過程を踏まえた空間設計が行われ、大量の訪問者に対してそれぞれ異なる若戸

大橋や、北九州地域の市街地、埋立地や工場群への眺望体験を提供していた。

(2) 若松・戸畑それぞれの用地確保と会場整備は、若松・戸畑両市が各々会場用地の現状、将来的な利用の見通しを持った上で独自の予算措置を行っていた。

(3) 博覧会終了後の会場跡地では恒久施設の撤去や陳腐化が進み、若松会場跡地では本来の周遊性やそこから得られる多様な眺望の魅力が失われた。また戸畑会場跡地では、民間の集客施設のみに依存したため、用地の立地特性や市街地の市民生活と結びついた新たな滞在機能を獲得できなかった。

(4) 複数の交通機関の連係が消え、歩行系の交通網が衰退した。このため若松と戸畑の両市街地を接続する手段は単一化されて、交通空間全体として「都市体験の舞台」ではなく「移動する通路」としての性格を強めた。

(5) 公共事業に付随するイベントでは、都市の中での用地の将来の位置づけや機能に見通しを据えることが求められる。イベント会場の跡地に都市的な機能を新たに定着させるには、アクセス手段を長期的な視野で確保し、それを維持するに十分な都市形成のための公共の政策を継続することが必要と考えられる。

参考・引用文献

1) 若戸博会誌編集事務局編：若戸大橋完成記念 産業・観光と宇宙大博覧会、1964

若戸大橋建設に際しての博覧会会場設置とその跡地利用に関する研究

松尾篤史，仲間浩一

本研究では、若戸大橋供用の際に開催された記念博覧会である“若戸博”を研究対象とし、その会場用地の確保と空間整備の手法を調べ、若松・戸畑の両市街地と会場用地の関係を考察し、その後の会場跡地の変遷をたどることで、都市空間形成に対する影響を明らかにした。本研究の結論を以下にまとめる。

- ・若戸博の用地の確保と会場整備に関しては、若松・戸畑それぞれの用地の立地特性を生かした技術的方法や予算的措置がとられて、それぞれの固有の景観体験を生み出した。
- ・会場の跡地の現在の機能や都市空間との関係づくりに対して、博覧会後の継続的開発の欠如や、用地周辺の歩行系交通網・滞在機能の衰退が、多大な影響を与えている。

A Study on Installation and After Use of a Site for the Memorial Exposition at the Opportunity to Construct the Bridge 'Wakato-Ohashi'*

By Atsushi MATSUO, Koichi NAKAMURA

The paper investigates the memorial 'Wakato' exposition at the opportunity to construct the bridge 'Wakato-Ohashi'. After searching histories on preparation of the exposition and after-use of the site space, we made clear some following results:

- 1) We found characteristics of technical method and budgetary steps for securing and maintaining the exposition site, and also influences on each of these own landscape.
- 2) The present function in the exposition site and the connection through town space are influenced by a decline of;